

第二十三回 沼田城

～北関東随一の五層の天守～

沼田城は、関東平野北辺の地の、利根川と薄根川の合流点の東に位置する城です。この城については、第十七回の名胡桃城でも触れていますが、今回はより詳しくご紹介することにしましょう。

沼田城の築城と諸勢力の争奪戦

沼田城は、利根沼田地域に鎌倉時代から根を張った沼田氏により築城されました。時期としては1531年に完成したとされます。この後、この城は周囲の諸勢力、つまり、北の上杉(長尾)氏、南の北条氏、西の武田氏の三大勢力の狭間に置かれてそれらに翻弄されることになります。

沼田城築城時から暫くの利根沼田地域は、上杉(長尾)氏と北条氏の最前線にあたっており、沼田氏一族内は、親上杉派と親北条派に分かれて内紛状態に陥っていました。そのため諸勢力の介入を招き、1569年以降は上杉輝虎(後の謙信)の直接支配を受けます。ここから始まる上杉氏対北条氏の争奪戦、北条氏対武田氏配下の真田昌幸の争奪戦、そして名胡桃事件へと続く一連の流れは、第十七回の名胡桃城に記載してあります。

真田信幸(信之)による大改修

名胡桃事件から豊臣秀吉の小田原征伐を経て、利根沼田地域2万7千石は、1590年に真田昌幸の領するところとなります。この地域は、昌幸の本拠地である信州上田からは離れていたため、昌幸は、嫡男の信幸(後に信之)を派遣します。

沼田城に入った信幸は城の大改修に着手し、1597年(一説に1607年)に五層の天守を上げました。この頃、関東

には五層の天守は存在せず、後に完成する江戸城があるだけです。この天守については、実在を疑う向きもありますが、後に江戸幕府に届け出された絵図にはしっかりと記載されています。

関ヶ原

信幸は、徳川家康の重臣である本田忠勝の娘で、家康(一説に秀忠)の養女である小松姫を娶っており、親徳川の立場にありました。そのため、1600年に起こる関ヶ原の戦いでは、父の昌幸と弟の信繁(俗称幸村)が石田方に与したのに対して、徳川家康に忠誠を誓うことになります。

関ヶ原の本戦前に、真田父子は、出陣先で徳川方と石田方のいずれに味方するかを話し合い、信幸はその場から直に家康の陣に向かい、昌幸と信繁は、本拠地の信州上田城に向かいました。そして、昌幸と信繁の二人は、上田城への帰路の途中に沼田城に立ち寄ります。その時に沼田城を預かっていたのは信幸の妻小松姫ですが、夫がいないことを怪しみ、例え義父、義弟であろうと城に入れるわけにはいかないと行って、二人の入城を拒否しました。これに対して、昌幸は孫の顔が見ただけだと伝えますが、小松姫は城外の寺で監視付きで孫を合わせたため、昌幸は、武家の妻女はかくあるべきと褒めたと言われます。

その後、信之は、徳川秀忠の軍に加わって昌幸、信繁の籠る上田城に迫ることになりますが(第二次上田合戦)、この戦の経緯は、第十五回上田城をご覧ください。ちなみに、秀忠は昌幸に面目を潰され、後々まで真田一族に恨みを抱いたといえます。

結果として、関ヶ原の戦いは徳川方の勝利に終わり、信



信吉ゆかりの鐘櫓（復元）

之（戦後に信幸から字を改める）は、父昌幸の信州上田領を与えられ、沼田領を含めて9万5千石の大名となります。

信之の死

信之は、暫くしてから本拠を上田城に移し、沼田城には長子の信吉を置きます。その後、信之は、1622年に信州松代13万石に加増転封されますが、その際にも、沼田領は松代藩の属領として真田氏の下に残りました。

信之は長命で、在世中から再三幕府に隠居願いを出しますが、時の将軍の家光が、戦国生き残りの信之を「天下の飾り」として一線から外そうとせず、彼は90歳を過ぎてもお藩主の座にありました。そのうちに長子の信吉、孫の熊之助に先立たれ、ようやく1656年に願い叶って隠居し、次子の信政に松代藩を継がせたものの、この信政にまで先立たれてしまいます。そのため、松代藩に家督騒動が起こります。松代藩は松代領と沼田領に分れ、松代城々主はながく信之が務め、沼田城々主は、長子の信吉、孫の熊之助、次子の信政が次々と務め、信政が松代城々主になった後には、信吉の次子の信利が務めていました。信政の死にあたって、隠居していた信之は、信政の子の幸道に松代藩を継がせようとしています。ところがこれに信利が反発し、彼の妻の実家や幕府老中までもがこれに加担して、松代藩々主の座を狙いまし

た。信之は最後の力を振り絞って事態の収拾にあたり、幸道に当初のとおり松代藩を継承させ、信利を沼田藩々主として独立させる形で事を納めました。そして、1658年に93歳で天寿を全うしたのです。

信利の暴政

面白くないのは信利です。沼田藩として独立し、藩主の座には就きましたが、所詮3万石の小藩で、本家の松代10万石には遠く及びません。そこで彼は、派手に出費を重ねた上に暴挙に出ます。強引に検知を行って表高14万4千石と幕府に過大に届け出て、領民に重税を課したのです。さらに、幕府の両国橋工事の御用木の調達を引き受けながらそれを果たせず、かさねて領民から幕府に直訴があって、信利は、幕府から治世不良と工事遅延の責めを問われて1681年に改易されてしまいました。

そして翌年に、沼田城は、幕府の命により、五層の天守はもちろん、石垣も破壊され、堀は埋め立てられてしまいました。

沼田城のその後

沼田領には、幕府天領を経て、本多氏、黒田氏、土岐氏が入りますが、沼田城の復興は小規模なもので、真田氏時代の規模には戻りませんでした。現在は、沼田公園として整備されており、遺構は少ないですが、城が典型的な崖城のため、利根川の断崖上からなかなか良い景観が望める場所になっています。



本丸西櫓台石垣（推定：真田氏時代）